

映画評



原一男・監督作品

『水俣曼荼羅』を見て

疾走プロダクション、2021年

評者

 伊東 紀美代

水俣病互助会

ドキュメンタリー映画監督として数々の話題作を世に送り出してきた原一男さんが「水俣曼荼羅」を完成させ、7月に水俣で試写会を行った。

この映画は、2004年10月、チッソ水俣病関西訴訟、最高裁判決の日に撮影を開始している。以後2018年に撮影を終了するまで撮りためた映像は1000時間に及び、編集には5年の歳月をかけて、3部作・6時間12分の大作となった。

関西訴訟は、最高裁で原告が勝訴し、不十分ながら水俣病に関する国・熊本県の行政責任が確定した。また、水俣病の感覚障害が、従来言われてきた末梢神経の損傷ではなく、中枢（大脳皮質）の損傷であることが認められた。この問題は、第1部『病像論を糾す』に詳しい。熊本大学の浴野・二宮両医師の実証的研究が最高裁で認められた意義は大きい。当然、神経内科学会等で議論され、水俣病像が修正されるべきだが、学会で取り上げられることはなく、認定申請に対する検診や審査も未だ末梢説に軸足を置いた判断で棄却が続いている。

映画は、時系列に沿って水俣病被害者互助会の第二世代訴訟、関西訴訟勝訴後に増えた申請患者への特別措置法による第二の幕引き、溝口訴訟・Fさん訴訟の最高裁勝訴などを克明に記録している。

原さんと助手の長岡さんは、原さんが大学に仕事を持っているため、主に夏休みや冬休みに1～2週間滞在して取材していた。裁判や、国・県との交渉、集会といった非日常の出来事もあるが、普段は病と向き合いながらの単調な暮らしである。このような日々を撮り続けて作品になるのだろうか、と心配なこともあった。しかし、原さんは患者たちの何気ない暮らしの中に分け入り、心の抑揚を見事に捉えて、観る者の感情を揺さぶる作品に仕上げてくれた。

この映画に度々登場する、生駒秀夫さんは、1943年生まれ、中学生であった58年の夏休みに目の前の茂道の海でカニを捕って食べて発症した。56年には水俣病は公的に確認されていたが、彼はそのことを全く知らなかった。重度であったが、熊大病院、水俣市立病院に入院の後、水俣病を必死に隠して、関西で働いた。両親を亡くし、家族もなく家もない彼の“帰るべき家庭を持ちたい”という願いは切実で、妻・幸枝さんとの結婚について語る場面は秀

逸である。

生駒さんは、若い頃は、外からは症状が分らない程、快復したそうだが、年齢を重ねると共に症状が再び出現し、ハンター・ラッセル症候群がそろった典型的な重症の患者である。しかし、彼は船を持ち、穏やかな日には海に出て魚を釣る。年に1回は、船を陸に揚げ船底のフジツボやカキガラを落とし、塗装するという作業を一人でやり遂げる。シャツのまま、原さんと一緒に海に飛び込んだりもする。

水俣病被害者互助会の第二世代訴訟では、被告側代理人や、時には裁判官まで、本人尋問で、例えば原告団長の佐藤英樹さんに、「船を持っていますね」「魚釣りができるんですか？」等と聞く。被告側証人として出廷した医師は、「症状と日常生活に乖離がある」等と詐病を疑うような証言をして、原告を愚弄し、人格を貶める。そんな人たちに、この映像を見せたいと思う。人間の・生命あるものの「生きる」ための能力、その力強さ、不思議さにあらためて深い感動を覚えた。

関西訴訟最後の原告団長であった、川上敏行さんも忘れられない。川上さんは、勝訴後行政認定されたが、「裁判で解決済み」として、チッソは協定書締結を拒否、国は、公健法による補償給付も認めず、これらに係る裁判もすべて敗訴となった。これは法的にも、倫理的にも許し難い、権力側の“いじめ”である。晩年、川上さんが強い孤独感を滲ませて、闘うことの虚しさやあきらめを口にされた映像に、我々の力不足、連帯する力の乏しさを思い、申し訳なさに涙した。私たちが今後、忘れてならない課題と思う。

坂本しのぶさんが、自身の恋を明るく語っている場面は、見る人によって感じ方が違うだろう。しのぶさんが中学入学の前年、第一次訴訟が提起され、以後水俣には多くの人が訪れるようになった。客人（まろうど）は、時に、しのぶさんが常に感じている、身体や、生活の不自由さを反転させるような新しい価値観や世界観を匂わせていて、その先には輝かしい自由な世界が開けるような夢を見ることができたのかもしれない。彼女は一生懸命、客人に思いを届けようとする。夢が叶わぬことを彼女は十代の頃から知っているけれど、それでも倦むことなく夢を見る。それは彼女の強さだ、と私は思っている。

映画の最後のシーンは、田中実子さんが登場する。実子さんは2歳11カ月で発病し、姉・静子さんと共に水俣病公式確認のきっかけになった人である。静子さんは3年後に亡くなるが、実子さんは急性期を脱して生き延びてくれた。2018年の晩春、車イスで久しぶりに外出し、月浦の高台の公園で海を見ている65歳の実子さんの姿で、この映画は終わる。彼女が何を感じていたのか、誰も分からない。しかし、彼女は生きている。この記念碑的大作を、実子さんが締めくくってくれて本当に良かった。

水俣での試写会で、60人余りの方が視聴した。「6時間を長いと思わなかった。」「もっと見ていたい」「患者の方たちを、一層好きになった。」等という感想が寄せられた。

膨大で複雑な水俣病事件の中で、犠牲を強いられた人々が、雄々しく、あるいはたおやかに生きる姿を、原さんとスタッフの方たちは、愛情深く見つめ続け、作品に仕上げてくださった。心から感謝を申し上げる。